

## 「新ケッヒェル作品目録」について

講師：コーネル大学教授（音楽学）哲学博士 ニール・ザスラウ

通訳：日本モーツァルト協会会長 海老澤 敏

日時：1994年6月26日 午後2時～4時半

場所：四谷 コア石響

記録：野口 秀夫

（海老澤会長挨拶）

ニール・ザスラウ先生については一昨日、日本モーツァルト協会でご紹介した。私はザスラウ先生を論文で知ったのち、1990年にウィーンで初めてお会いした（1992年が創立150年のウィーンフィルのシンポジウムで）。先生は1991年にはリンカーンセンターのモーツァルト全曲演奏の音楽企画をたてられ、それに基づき2冊の本を出版された（「ザ・モーツァルト・レパートリー」と「ザ・コンプリート・モーツァルト」）。「レパートリー」では完成した曲は全部番号付けされている。「コンプリート」では演奏できる作品のジャンル別解説を他の人の協力を得て完成されている。それに先立ってホグウッドの交響曲集に音楽学上の協力をされ、その詳しい解説が1987年に本となった。先生はフルートの勉強をジュリアードでジュリアス・ベイカーに師事されており、長らく演奏者として活躍された。ハーバードでドクターをとられている。新全集完成に伴って作品目録を作ることになり、いささつはあったものの先生が引き受けられることになった。

（ザスラウ教授講演）

新しいケッヒェル作品目録について本日皆様にお話しできることは大変光栄である。日本語ができないことを申し訳なく思う。

### I. はじめに

ケッヒェル作品目録の初版は1862年に出版され、ご存じの通りK1からK626までが含まれている。第2版は1905年に小さな訂正が加えられたのみである。1937年の第3版はアインシュタインにより多くの改訂、順序の変更、真贋の逆転、新発見の追加がなされた。アインシュタインはまた未完成、失われた作品も年代順の目録に取り込んだが、あるものはAnhangの中に入れた。ケッヒェルの番号が既に様々な文献に使われてしまっていたので、新しい年代については別番号として小文字を付けた。1947年にアインシュタインはアメリカで第3版の補遺を追加した。東ドイツのライプツィヒで出版されたいわゆる第4、5版は1937年版のリプリントであり補遺は反映されていない。ついに第6版がギークリング、ヴァインマン、ジーバースにより1964年に出版され、アインシュタインと同様に新番号をつけた。第7、8版は第6版と全く同じ版である。これがモーツァルトの作品のいくつかが二重、三重の番号を持っている理由である。

モーツァルトの作品を研究している人はだれでもケッヒェルの新版が必要と考えている。なぜなら1964年以降非常に沢山の研究がなされ、ザルツブルクでは新モーツァルト全集が完成し、当時利用できなかった18世紀のいろいろな記録が今や参照できるようになったからである。新モーツァルト全集が最初に出た当時（1955年）「この新全集が完結した時に、作品の主題目録をインデックスとして出す」としていたが、何年も経ったことにより、やっている人も変わり、背景も変わり、今や新全集の枠内で出そうとしていた目録はケッヒェルの新版と同一のものでなければならないとの合意に達した。私自身「Der Neue K<sup>u</sup>chel（新ケッヒェル）の提案」という私の一般的考えを提示する文書を書いた。その中で新モーツァルト全集編集部と2つのドイツの出版社（ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社とベレンライター社）の間の原則的な合意を紹介している。この私の提案は2週間前にモーツァルトウムのモーツァルト中央研究所で弟子のクリフ・アイゼンにより提示された。私は出席できなかったが、海老澤氏がそこに出席されていたので質問あればお答えいただけよう。これからお話しするのは、提案の要約と解説である。なお、今日お話しするのが、最初の公への提示となる。

### II. タイトルページと編集に携わる人

配布コピーの通りタイトルページには「新ケッヒェル」とあり、第9版という言い方をしていない。その理由は2つある。第1に既にお話ししたように第何版という数え方は何年にも亘って目茶苦茶になってしまっているのである。第2に古いテキストには多くの不要な文化的要素があったり、時代遅れの態度や間違いがある。21世紀に向かう新しいテキストを作らなければならないから出発点を綺麗にしたい。

さて、それではタイトルページに載せられた人々について紹介しよう。ケッヒェルとザスラウについては省略する。クリフ・アイゼンはコーネル大学で私の教え子だった哲学博士である。今はニューヨーク大学の教授をしており、モーツァルトに関する本、論文、評論の貴重な著者である。彼の大きな論文『モーツァルト父子のザルツブルクのコピストたち』（1992）は1992年のアメリカ音楽学会賞

を得た。ウルリヒ・コンラッドはドイツの最も若い音楽学の教授（フライブルク大）で、モーツァルトのスケッチに関する本を書き、新全集の未刊の2冊（スケッチ）の編集者である。コンラッドは新全集と新ケッヒェル間の公的な仲介者の役割を果たす。彼は最近ヘルマン・アーベルト賞（将来を期待される若い音楽学者に与えられるドイツ音楽学会の賞）を受賞した。ジョン・アーサーはオックスフォードでアラン・タイソンに就いた。今ベルリンに住んでおり、モーツァルトの筆跡、五線紙、インクの研究家である。オットー・ビーバ博士はウィーン楽友協会資料部長で17、18世紀音楽の専門家である。デクスター・エッジはアメリカ人で音楽史をウエルズ大で教え、南カリフォルニア大で博士号をとった。彼はアメリカ音楽学会の奨学金を貰っている人で長年ウィーンに住んでいる。ゲルトラウト・ハーバーカンプは音楽学者で、図書館学を専門としている。彼女はモーツァルトの初版に関する本を書いており、ミュンヘンのバイエルン国立図書館で働いている。クリストフ＝ヘルムート・マーリングはマインツ大の教授で国際音楽学会の前会長であった。マーリングは18、19世紀音楽の研究家である。ヴォルフガング・ブラートはアウクスブルク大の教授でレームとともに新モーツァルト全集の主幹をやっておりなくてはならぬ存在である。ヴォルフガング・レーム教授はブラートとともにもう一人の主幹だったが二人とも定年が迫っている。スタンレー・セイディは英国のモーツァルト専門家でニュー・グローヴ音楽辞典の編集者である。以上のうち6人（アイゼン、コンラッド、マーリング、レーム、ブラート、ザスラウ）は新全集の編集に携わっている。

ここでブライトコプフ・ウント・ヘルテル社の長い歴史を話す時間はないが（興味のある方はニュー・グローヴに出ているから読むとよい）、社は1719年にライプツィヒで設立された有名な18、19世紀のドイツ作曲家の出版社であり、色々な全集版（バッハ、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトベルリオーズ）、いわゆる旧全集を出した。最近統一（1989年）によりライプツィヒの文庫・工場がヴィースバーデンに返還された。工場はひどい状態だったが修復がなった。1994年1月には創立275周年を迎え、工場の再開祝いと併せライプツィヒで祝賀会が行われた。この催しには沢山の演奏家、音楽学者、評論家、同業者が集まり新聞に大きくとりあげられた。この後この夏にはブライトコプフ・ウント・ヘルテル社と私は共に「新ケッヒェル」についての広報をする。英・独で書かれ世界中の新聞その他に送られる。この公開状には今日の内容に加え、今失われていたり秘蔵のモーツァルトの自筆譜に関する情報をほしいとの訴え掛けも含まれている。

### Ⅲ. 何故新版が必要か

この問題には新しい情報という点と新しい考え方という点から答えたい。

1956年（生誕200年）にはモーツァルトと後の音楽についてはよく知られており、幾つかの新しい発見が出てきた程度であった。私自身博士論文を書こうとしてコロンビア大へ行ったところモーツァルトは止めろ、もう研究することは残っていないと言われた。このことは皮肉な状況だった。1956年からほぼ40年経ってみると、我々が知っていたと思っていたことは完全にひっくり返っている。その頃伝記に書かれていたことは今や誤ったドキュメントによっているか、正しいドキュメントの誤った解釈によって書かれていたことが分かってきた。モーツァルトの音楽の演奏について知っていたことは最近の古楽器による演奏によりひっくり返った。モーツァルトがどのように作曲していたかについて知っていたこともひっくり返った。第6版の年代順はもはや使えない。新しいケッヒェルはそれ以外知られた多くの情報をも提示しなければいけない。古い目録中の多くの誤りも訂正しなければならないし、新しい誤りも沢山発生させてはいけない。新しい情報は音楽学者だけでなくモーツァルトを愛するすべての人に必要である。

音楽の実例を聴いてみよう。交響曲 へ長調 K19a。この番号は古い目録では失われたものとして記されていたもので、モーツァルトが9歳から10歳にかけてロンドンで書いたものである。第1楽章の最初を聴こう（音楽を聴く）。

次の例は今まで全く知られていなかった無番号の曲である。モーツァルトは彼が知っていた家族の娘さんのために書いたと思われる。ケー・デエスト(Kdeest)と呼ぶ（ソプラノのためのアリア『いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを』を聴く）。

最後の例として後期の作品をあげたい。K386である。この曲は不思議な歴史を持っている。自筆譜は19世紀半ばに英国人が1ページずつ破って知り合いにお土産としてあげていた。多くのページが近年になり公のコレクションや個人のコレクションにあることが分かった。かなり多くの葉が見つかったので不足部分も再構成できたが、最後の部分がどうしても見つからなかった。この最後の部分が揃ったのは10年ほど前でアラン・タイソンがブリティッシュ・ライブラリーで発見したのであった。私はちょうどその時期にビルソン、ガーディナーのピアノ協奏曲全集のスーパーバイザーをしていた。タイソンが親切にもファックスを送ってきてくれたので録音に間に合ったのである（音楽を聴く）。

### Ⅳ. 新ケッヒェルの基となる考え方

明快で基礎的な、完全で正確な情報を提供するという目的のために、これからやってみようとしていることの幾つかを話そう。

A. 新ケッヒェル目録の主部は勿論年代順である。そして、ケッヒェルの最初の考え方に立ち戻りモーツァルトによって完成された作品のみから構成される。この方針によれば単にクラヴィーア用の小品（シュタードラーが完成している）ばかりでなく、ハ短調ミサK427やレクイエムK626も主部か

ら消え去る。これは当然アインシュタインが1937年に主部に取り込んでいた断片やスケッチを排除する。可能な限り主部の年代順番号はケッヒェルの初版の番号に立ち戻るが若干の新しい番号も含まれる。

B. スケッチ／断片には別の年代順の番号が付く。実際には個々に主部と関連づけリファレンスが付く。年代順でありながら完成作品とスケッチ／断片とを分けるのは、完成された作品のクロノロジーをはっきりと明確化することを意味し、それにより将来の伝記作家がスケッチ／断片と完成作品の関係を間違えないように（1曲の完成作品に10個のスケッチがあったり、4曲の完成作品それぞれに一つづつ断片があるなどの事実を見逃さないように）するためである。これから先は思慮深い音楽歴史家はベートーヴェンは刻苦勉励しスケッチを沢山書いたがモーツァルトは曲全体が一度に聞こえてきてぱっと書き下ろすだけでよかったのだなどと言えなくなる。

C. モーツァルト時代の真正な目録、筆写譜や出版に見られる演奏に関する情報は当時のままに書き出す。つまり19世紀や20世紀の表現や考え方に変えない。（今後は bassoを決して violoncello e contrabasso としない。18世紀の bassoは歌手のことでもあり、チェロ、コントラバス、チェロ&コントラバス、チェンバロ、オルガン、それらのコンビネーションでもあったからである。また、モーツァルトと父レーオポルトが様々な呼び方をしているセレナータ、ディヴェルティメント、カッサシオン、パルティア、ナハトムジーク、ノットウルノなどを恣意的にセレナーデに変えない）

D. 特別に配慮するのは真正な筆写譜、真正な出版譜である。過去にはこれらは無視されていた。そういった重要な筆写譜や版にはしばしばモーツァルトが最後にチェックした訂正や演奏実践の重要な情報がある。これらは自筆譜には欠けている情報である。

E. 年代を限定できずに推定で作品に年代付けを行うのを避けるため新しい方法を開拓しなければならない。年代順目録においては作品の年代が与えられなければそこには取り込めない。年代づけのできない作品をそこに取り込むことは知的不誠実である。

F. ある作品を主部に入れるか疑わしい作品の付録に入れるかを決めるに当たっては懐疑主義をとる。その作品が本物であると納得できなければ主部から外す（外す理由がないから主部に残しておくほうを選ばない）。

G. 最後に書いた稿は徹底して疑問視する。一つだけの稿でなく幾つもの段階の真正な稿がある場合はすべて記述する。非常に沢山の作品に真正な稿が複数ある（例えばK175、K425、フィガロ、ドン・ジョヴァンニ）。これらにケッヒェル番号が一つではおかしいではないか。

H. 今までのケッヒェル目録にジャンル別の目録が付いているが、検索用にもっと完璧にする。一つのジャンルに当てはまらず複数のジャンルに入る曲は2つのジャンルに出る。K525はセレナーデ／ディヴェルティメント／カッサシオン部門と室内楽の部門に出る。K89「キリエ・エレイソン」のテキストは宗教曲にもカノンにも出てくる。2台と3台のピアノ協奏曲はソロ楽器のジャンルの他、複数のソロ楽器の協奏曲にも出てくる。

## V. 進め方の提案

新ケッヒェルはコーネル大のマッキントッシュにデータベースが整っている。コンピュータ化はインデクスを付けるとき、学問的研究文献を作るときに役立つものだ。新ケッヒェルは2つの版で出版する。ドイツ語版と英語版である。私は英語で書きライブツィヒでドイツ語にする。新モーツァルト全集の予約者1200人はドイツ語のタイトルページが付いた版を新全集の最終刊として受けとる。

## VI. 当面のスケジュール

タイトルページのコピーにあるように2000年の発行を目指している。2000年というとドイツ、オーストリアの同僚はクレイジーと言った。私は今までの情報の集積と研究の進捗から2000年にはできると信じている。一方新しい研究成果が非常に多いのも事実である。しかしそれらをすべて取り込んだとしてもまだ未解決の問題が残るので、それらを取り入れれば2000年は無理であろう。確実に間違っていること、正しいと分かったことを取り入れるのなら2000年の出版は可能である。

音楽家、研究家がこの新ケッヒェルを我々の文化の中のモーツァルトの位置付けに相応しい新しい参照文献としてとらえていただくことを望む。そして21世紀が始まるとき演奏家、音楽家、評論家、愛好家が抱くモーツァルトについての質問に答えられるものとなることを望む。

参考文献：Neal Zaslaw 'Leopold Mozart's List of his Son's Works' in Allan W. Atlas (ed.), Music in the Classic Period: Essays in Honor of Barry S. Brook (New York, 1985)

# 新ケッヘル

ルートヴィヒ・リッター・フォン・ケッヘル

による

ヴォルフガング・アマデー・モーツァルト

の完成した作品の

年代順主題目録の完全な新版

(失われた作品、未完成の作品、編曲作品、疑わしい作品そして

偽の作品への解説を含む)

編集者

ニール・ザスラウ

共編者

ウルリヒ・コンラッド 及び クリフ・アイゼン

編集顧問

ジョン・アーサー

オットー・ビーバ

デクスター・エッジ

ゲルトラウト・ハーバーカンフ

クリストフ＝ヘルムート・マーリング

スタンレー・セイディ

特別顧問

ヴォルフガング・プラート

ヴォルフガング・レーム

2000年

ブライトコプフ & ヘルテル ・ ヴィースバーデン、 ライプツィヒ & パリ